



限界效用平均ノ法則, 其ノ説明, 其ノ適応及ビ其ノ修正(2)

河上, 肇

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 15(2):201-222

(Issue Date)

1913-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052073>



限界效用平均ノ法則、其ノ説明、其ノ適用

及ビ其ノ修正 (其二)

京都法科大學助教授

法學士 河

上

肇

本號所載
下篇目次

- 六、限界效用平均ノ法則ノ適用 土地ノ生産力
- 七、土地耕作ノ集約度ヲ決定スル事情 (上)
- 八、土地耕作ノ集約度ヲ決定スル事情 (下)

六、限界效用平均ノ法則ノ適用 土地ノ生産力

以上述べタル所ハ、限界效用平均ノ法則ガ物ノ賣買ニ際シテ行ハル、場合ノ説明デアアル。然ルニ此ノ法則ハ、唯ニ物ノ賣買ニ際シテ行ハル、ノミナラズ、物ノ貸借ニ際シテモ亦タ行ハル、所ノ法則デアアル。抑々物ノ貸借ハ、之ヲ一見スル、時ハ物ノ賣買ト大ニ其ノ性質ヲ異ニスルガ如キモ、實ハ物ノ貸借モ其ノ本質ヨリ云ヘバ賣買ノ一種ニ過ギス。唯ダ物ノ貸借ト云フ場合ハ、其ノ賣買サル、所ノ目的物が、物ノ「體」ニアラズシテ物ノ「用」タル點ガ、普通ニ所謂賣買ト其ノ性質ヲ異ニスル點デ

アル。例へば家屋ノ賣買ト云フ場合ニハ、家屋ソノモノ、賣買デアルガ其ノ貸借ト云フ場合ニハ、其ノ一定ノ期間ニ於ケル用ノ賣買ナノデアル。而シテ前ノ場合ノ價格ハ之ヲ家屋ノ賣價ト云ヒ、後ノ場合ノ價格ハ之ヲ家屋ノ賃料(家賃)ト云フガ、實ハ何レモ賣買價格ノ一種ニ過ギザルモノデアル。(註) サレバ物ノ賣買ニ際シテ實現セラル、所ノ限界效用平均ノ法則ナルモノガ、物ノ貸借ニ際シテ全ク同ジ具合ニ實現サレツ、アルハ、自然ノ道理ナレドモ、姑ク限界效用平均ノ法則ノ一適用トシテ、其ノ物ノ貸借ニ於ケル作用ニ就キ、若干ノ説明ヲ加ヘテ本篇ヲ終ラウト思フ。

物ノ用ニ對スル需要額ガ其ノ價格ト如何ナル關係ヲ有スルヤヲ明カニセンガ爲メニ、吾人ハ茲ニ其ノ一例トシテ耕作用ノ土地ノ用ニ對スル需要ノコトヲ説明シヤウト思フ。而シテ是ガ爲メニハ、吾人ハ先ヅ土地ノ生産力ガ如何ニシテ定マルカヲ述べナケレバ爲ラス。何故ト云フニ、耕作用ノ土地ノ用ニ對スル需要ノ強弱ハ其ノ生産力ニ依ツテ支配サル、カラデアル。

抑々吾人ガ貨物ノ生産ヲ爲スニ當リテ、外物ノ助ケヲ必要トスルハ論ナキコトデアル。乍併元來生産ト云フハ人ノ行爲ナルガ故ニ、物ト人ト相俟ツテ始メテ生産

ト云フコト行ハル、ニテ、物ソレ自身ガ獨立シテ所謂生産ヲ爲スト云フコトハ無イ。サレバ土地ノ生産力ト云ヘバ、普通ニハ客觀的ニ一定シタル物理的性質ノ如クニ思ヘドモ、實ハ物ノ效用ト云フト同ク、土地ト人ト相俟ツテ始メテ土地ニ生産力ナルモノガ發生シ、又タ其ノ生産力ノ大小ガ決定セラル、ノデアアル。然ルニ從來地代ノ論ヲ爲ス者、多クハ土地ノ生産力ヲ以テ客觀的固定的ノモノト爲スハ、恐ク一ノ誤解デ有ラウ。

其ノ證據ニハ、現ニ同ジ土地ニテモ、之ガ耕作ノ集約ノ程度ニ依ツテ、其ノ生産力ハ決シテ同クナイノデアアル。例ヘバ茲ニ上中下ノ三種ノ土地アリトセンニ、此ノ三種ノ土地ニ同ク百圓宛ヲ投下スルナラバ、其ノ收穫左ノ如シトスル。

上田

一〇〇石

中田

九〇石

下田

八〇石

然ル時ハ上田ト中田トノ生産力ノ差異ハ一〇石ニシテ、中田ト下田トノ生産力ノ差異モ亦タ一〇石ト爲リ、從テ上田ト下田トノ生産力ノ差異ハ二〇石ト爲ル。然ルニ若シ是等三種ノ土地ニ各々貳百圓宛ヲ投下シ、而シテ其ノ收穫左ノ如シトスル。

限界效用平均ノ法則其ノ説明其ノ適用及ビ其ノ修正

最初ノ百圓ニ對スル收穫			
上	中	下	合
田	田	田	計
一〇〇	九〇	八〇	一九〇
石	石	石	
九〇	八〇	六〇	一七〇
			一四〇

然ル時ハ、其ノ生産力ノ差異、上田ト中田トニテハ二〇石、中田ト下田トニテハ三〇石、上田ト下田トニテハ五十石ト云フコト、爲ル。猶ホ進ンデ是等三種ノ土地ニ各々參百圓宛ヲ投ジ、而シテ其ノ收穫左ノ如シトスルナラバ、

最初ノ百圓ニ對スル收穫			
上	中	下	合
田	田	田	計
一〇〇	九〇	八〇	二七〇
石	石	石	
九〇	八〇	六〇	二三〇
			一八〇

其ノ生産力ノ差異ハ、上田ト中田トニテ四〇石、中田ト下田トニテ五〇石、上田ト下田トニテ九〇石ト云フコト、爲ル。之ニ依ツテ見レバ、三種ノ土地ニ同ジダケノ資本ヲ投ズルモ、其ノ投ズル所ノ資本額ノ大小ニ依ツテ、是等三種ノ土地ノ間ニ於ケル生産力ノ差異ハ、次ノ如クニ變化スルノデアル。

百圓ヲ投ズル時

貳百圓ヲ投ズル時

參百圓ヲ投ズル時

上田ト中田トノ差異

一〇石

二〇石

四〇石

中田ト下田トノ差異

一〇

三〇

五〇

上田ト下田トノ差異

二〇

五〇

九〇

況ンヤ若シ放下スル資本額ニ差異ヲ設ケ、上田ニ參百圓、中田ニ貳百圓、下田ニ百

圓ヲ投ズルコト、センカ、其ノ收穫ハ、上田二七〇石、中田一七〇石、下田八〇石ト爲

リ、從テ其ノ生産力ノ差異モ、上田ト中田トニテ二〇〇石、中田ト下田トニテ九〇石

上田ト下田トニテハ一九〇石ト爲ル。之ニ依リテ見レバ、簡單ニ土地ノ生産力ト云

ヒ、又ハ上中下田ノ生産力ノ差異ナド云フモ、談決シテ容易ナラザル事ヲ知ルニ足

ル。

猶ホ分リ易キ爲メニ、同ジ事ヲ他ノ方面ヨリ説明センニ、同ジ土地ニテモ耕作者

ノ技能如何ニ依リテ、縱ヒ使用スル所ノ資本又ハ勞働ノ分量ハ同一ナリトスルモ、

其ノ生産力ハ同カラザルモノデアル。例ヘバ甲ヲ以テ最モ優等ナル耕作者ト爲シ、

癸ヲ以テ最モ劣等ナル耕作者ト爲シ、而シテ此ノ兩人ガ各々同一ノ資本又ハ勞働

ヲ投ジテ、上中下三種ノ土地ヲ耕作スル時、其ノ收穫左ノ如シトスル。

甲ノ收穫 癸ノ收穫	上田			中田			下田		
	二〇〇石	一五〇石	一二〇石	一〇〇石	九〇石	八五石	一〇〇石	九〇石	八五石

然ル時ハ、同ジ分量ノ資本又ハ勞働ヲ用キナガラ、甲ガ耕作スル時ハ三種ノ土地ノ生産力ノ差異、上田ト中田トニテ五〇石、中田ト下田トニテ三〇石從テ上田ト下田トニテハ八〇石トナリ、又タ癸ガ耕作スル時ハ、三種ノ土地ノ生産力ノ差異、上田ト中田トニテ一〇石、中田ト下田トニテ五石從テ上田ト下田トニテハ一五石ト爲ル。即チ此ノ場合ニハ、甲ト癸ト共ニ同ジ分量ノ資本勞働ヲ用キナガラ、三種ノ土地ノ生産力從テ三種ノ土地ノ間ニ於ケル生産力ノ差異ハ、決シテ同クナラヌノデア
ル、思フニ斯カル關係ハ、之ヲ教育上ノ事例ヨリ類推スレバ、却テ了解ニ便宜デ有ラ
ウ。例ヘバ之ヲ小學校ノ教育ニ就イテ見ルニ、兒童ニ依リテ生來頭ノ良キガアリ惡
キガアルハ、恰モ土地ニ上田下田ノ差異アルガ如キモノデア
ル。而シテ是等ノ兒童ヲ訓育スルニ當リ、全ク同ジ教室ヲ用キ同ジ教科書ヲ用ユルトスルモ、教員ノ善シ
惡シニ依ツテ其ノ成績ニ少カラザル差異ヲ生ズルハ、恰モ同ジ分量ノ資本勞働ヲ
用キナガラ、耕作者ノ優劣ニ依ツテ其ノ收穫ニ少カラザル差異ヲ生ズルト同ジコ

トデアル。然ルニ茲ニ注意スベキコトハ、教員ノ善シ惡シニ依ツテ成績ニ差異ヲ生ズル點ハ等シトスルモ其ノ差異ヲ生ズル度合ガ兒童ノ能力如何ニ依ツテ著ク大小ガアルト云フコトデアル。例ヘバ白痴ニ近キ低能兒ハ縱ヒ善キ教員ヲ附クルモ其ノ成績ハ所詮思ハシカラザルモノニテ、即チ善キ教員ヲ附クルモ惡キ教員ヲ附クルモ其結果ニハ強イテ甚シキ差異ヲ見ザルモ、之ニ反シ、優秀ノ頭腦ヲ具ヘタル兒童ト爲ランカ、善キ教員ヲ附ケタル效果ガ特ニ著ク現ハル、モノデアルガ、此點ハ上中下田ノ生産力ノ差異ガ、耕作者ノ優等ナル時ハ特ニ著ク、其ノ劣等ナル時ハ左迄甚シカラズト云フト、全ク同ジ趣デアル尤モ此ノ場合ハ、縱ヒ耕作者ノ使用スル資本勞働ノ分量ハ同ジトスルモ、其ノ耕作者自身ニ優劣ノ差ガアルノデアルカラ、其ノ耕作者ノ勞力ヲ計算ニ入ル、ナラバ、甲ノ耕作スル場合ト癸ノ耕作スル場合トデハ、土地ノ上ニ使用セラル、勞働ノ分量又ハ品質ガ相違スル譯ナノデ、ツマリ前ニ述べタル命題、即チ同ジ土地ニテモ其ノ生産力ハ之ガ耕作ノ集約ノ程度ニ依ツテ同カラズト云フ場合ノ一特例ニ過ギヌケレドモ、或ハ了解ニ便ナル所モアラシムカトテ、序ニ此ノ一例ヲ附記シテ置イタ次第デアル。

之ヲ要スルニ土地ノ生産力ナルモノハ、決シテ客觀的ニ固定シ居ルモノデハ無ク、之ガ耕作ノ方法如何ニ依ツテ種々ニ變更スルモノデアル。サレバ各種ノ土地ノ間ニ存スル地代ノ差額ヲ知ランガ爲メニ、其ノ生産力ノ差異ヲ確メントスルニ當リテモ、吾人ハ先ヅ其ノ耕作ノ方法如何ヲ前提シテ掛カラチバ爲ラヌ。コレ恰モ單純ニ或ル貨物ノ需要如何ト云ヒタルノミニテハ之ヲ定ムルニ由ナク、必ズヤ一定ノ人ヲ前提シ、然ル後始メテ其人ニ對スル貨物ノ效用ノ度合ヲ定メ得ルガ如キモノデアル。仍ツテ以下吾人ハ、土地ノ耕作ノ集約度^{イシテシチ}ハ如何ニシテ定マルベキカヲ研究シ、以テ地代ノ決定原因ニ關スル一面ノ事情ヲ闡明シ置カント思フ。

七、土地耕作ノ集約度ヲ決定スル事情 (上)

土地ニ收益遞減ノ法則ノ行ハル、コトハ、多クノ人ノ否認セザル所デアル。今マ假ニ土地ニ放下スル出費ヲ勞働者數ニテ表ハシ、而シテ土地一町步ヨリ生ズル所ノ收穫ハ其ノ土地ノ上ニ使用スル所ノ勞働者數ヲ増加スルニ從フテ左ノ如キ成績ヲ現ハシタリトスル。

第一表

勞働者一人當 平均收穫	總收穫	勞働者數
10	50	5
15	150	10
18	270	15
19	380	20
18	450	25
17	510	30
16	560	35
15	600	40
14	630	45
13	650	50
11	605	55
9	540	60

此ノ如キ事情ノ下ニ於イテハ、總收穫ノ最モ多クナルノハ五〇人ノ勞働者ヲ使
 用シテ六五〇石ノ收穫ヲ得ル時デアルガ、併シ勞働者一人當ノ平均收穫ガ最モ多
 クナルノハ二〇人ノ勞働者ヲ使用シテ三八〇石ノ收穫ヲ得ル時デアル而シテ普
 通ノ教科書ニ說ク所ニ依レバ、右ノ如キ場合ニハ、企業者ハ其ノ土地ノ上ニ勞働者
 ヲバ二〇人マデハ使用スルケレドモ、其レ以上ハ使用セスト云フノデアル。乍併余
 ノ考フル所ニ據レバ、一定ノ企業者ガ一定ノ土地ヲバ如何ナル集約度マデ利用ス
 ルカノ問題ハ爾ク一般的ニ且ツ簡單ニ決定セラル、モノデハ無イ。蓋シ上記ノ如
 キ事情ノ下ニ於イテ、其ノ土地ノ上ニ勞働者ヲバ二〇人マデシカ使用セスト云フ
 ノハ、其ハ土地ガ無限ニ存在シテ居テ、從ツテ全ク地代ヲ支拂フハ必要ナク利用セ

ント、思ハ、思フ、ダケノ土地ヲ、バ如何程ニテモ、總テ、無償ニテ利用シ得ラル、場合
ハ、コトデア、ル。理由ハ後ニ説ク所ノ地代ヲ要スル場合ト併セ考フレバ直チニ了解
サル、コトデア、ル。今マ此ノ如キ場合ニ一定ノ企業者ノ使用シ得ル勞働者數ガ一
〇〇人ニ限定サレ居ルトスルナラバ——新開地ニテ土地ニハ限リナケレドモ、勞
働者ハ到底一〇〇人以上ハ得ラレズト云フ場合モアルベク、又タ縦ヒ勞働者ノ供
給ニハ此ノ如キ制限ナシトスルモ、企業者ノ能力ト併セ考ヘテ一〇〇人ダケノ勞
働者ヲ使用スルノガ最モ有利ダト云フ場合モ有リ得ル何レニシテモ兎モ角其ノ
企業者ノ使用シ得ル勞働者數ガ一〇〇人ニ限定サレテ居ルトスルナラバ——一
町歩ニ就イテ二〇人宛ノ勞働者ヲ使用スルコト故、其ノ企業者ハ詰リ全體ニ於イ
テ五町歩ノ田地ヲ利用スルコトニ爲ルノデア、ル。

(註) 此ノ場合土地ノ性質ハ總テ同一ト假定シ、且ツ使用スル所ノ地積ノ廣狹ハ企業能力ノ利用ニ何等關係ナキモノト假定ス
ル實際ヨリ云ヘバ土地ノ、性質ハ決シテ一樣ニ非ザルノミナラズ、同シ百人ノ勞働者ニテモ、之ヲ狹キ地積ノ上ニ集中シテ
使用スルノト、廣キ地積ノ上ニ散布シテ使用スルノトデハ、企業者ノ骨折ガ違フ譯デア、ル。乍併、茲ニハ議論ヲ簡單ニスル
爲メニ、總テ是等ノ差異ナバ暫ク無視シテ置クノデア、ル。

次ニ前ノ場合ト異リ、若シ土地ニ地代ヲ支拂フノ必要アリトスルナラバ、最大ノ

利益ヲ得ベキ耕作ノ集約度ノ定メ方ガ變ツテ來ル。例ヘバ其ノ地代ヲバ假ニ一町歩ニ付キ二〇〇石トシ之ヲ總收穫ヨリ差引キ且ツ勞働者一人當ニ平均スレバ其ノ勞働者一人當ノ平均收穫ノ最大限ニ達スル點ガ先ニハ一町歩ニ付キ二〇人ヲ使用スル場合タリシニ今ハ同ク一町歩ニ付キ三〇人ヲ使用スル場合ト爲ル。比較ニ便ナル爲メ前ノ場合ト今ノ場合ト併セ掲グレバ次ノ如クデアル。

第二表

勞働者數	總收穫高	右當勞働者平均高一	總收穫ヨリ地代ニ〇ヲ差引キタル殘額	右ノ勞働者平均高者
5	50	10	(-)30 (-)150	(-)30 (-)150
10	150	15	(-)50 (-)50	(-)50 (-)50
15	270	18	$4\frac{10}{15}$ 70	$4\frac{10}{15}$ 70
20	380	19	9 180	9 180
25	450	18	10 250	10 250
30	510	17	$10\frac{1}{3}$ 310	$10\frac{1}{3}$ 310
35	560	16	$10\frac{10}{35}$ 360	$10\frac{10}{35}$ 360
40	600	15	10 400	10 400
45	630	14	$9\frac{5}{9}$ 430	$9\frac{5}{9}$ 430
50	650	13	9 450	9 450
55	605	11	$7\frac{4}{11}$ 405	$7\frac{4}{11}$ 405
60	540	9	$5\frac{2}{3}$ 340	$5\frac{2}{3}$ 340

之ニ依ツテ見レバ土地ニ地代ヲ支拂フノ必要ヲ生ジタル場合(又ハ支拂フベキ地代ノ増加シタル場合)ハソノ然ラザル場合ニ比シ其土地ヲバ一層集約的ニ利用

限界效用平均ノ法則其ノ説明其ノ適用及ビ其ノ修正

スル方ガ利益デアルト云フコトガ分ル。即チ茲ニ假定シタルガ如キ條件ノ下ニ於イテハ、一町歩ニ付キ三〇人宛ノ勞働者ヲ使用スルガ最モ利益ナルガ故ニ、其ノ企業者ノ使用シ得ル勞働者ノ數ガ一〇〇人ニ限定サレ居ルトセンカ、全體ニ於イテ三町歩ト三分ノ一ダケノ土地ヲ利用スルガ最モ利益ト云フコトニ爲ル。而シテ勞働者ヲバ此ノ如キ具合ニ使用スト云フコトハ取りモ直サズ勞働者一人ニ付イテノ收益ヲ最大ナラシムル所以ニテ、畢竟吾人ノ前ニ述ベタル最大差益ノ法則(第四節參照)ノ適用ニ外ナラヌノデアル。

猶ホ右ニ述ベタル所ハ、一町歩ノ土地ニ對シ、如何程ノ勞働者ヲ組合ハスガ最モ利益ナリヤト云フコトナリシガ、コハ問題ヲ換ヘテ、三〇人ノ勞働者ニ對シ、如何程ノ面積ノ土地ヲ組合ハスガ最モ利益ナリヤト云フコト、スルモ、其ノ結果ハ全ク同一デアアル。試ニ前ニ掲ゲタル數字ヲ基礎トシ、三〇人ノ勞働者ニ對シ組合ハスベキ土地ノ面積ヲバ、五〇畝ヨリ次第ニ増シテ六〇〇畝ニ至ラシメ、其ノ結果トシテ生ズベキ收穫遞増ノ次第ヲ算出スルニ略ボ次表ノ如クニナル。

面積ノ増加ニ本ク 代ノ増加	收穫ノ増加ニ本ク 増加	増加セシ面積	總收穫	面積
—	—	—	270 _石	50 _畝
9 $\frac{1}{11}$ _石	56 _石	4 $\frac{6}{11}$ _畝	326 _強	54 $\frac{6}{11}$
10 $\frac{10}{11}$	64	5 $\frac{6}{11}$	390	60
13 $\frac{1}{8}$	26	6 $\frac{2}{8}$	416 _強	66 $\frac{2}{8}$
16 $\frac{2}{3}$	34	8 $\frac{1}{3}$	450	75
21 $\frac{3}{7}$	26	10 $\frac{5}{7}$	476	86 $\frac{5}{7}$
28 $\frac{4}{7}$	34	14 $\frac{2}{7}$	510	100
40	30	20	540	120
60	30	30	570	150
100	(—)30	50	540	200
200	(—)90	100	450	300
400	(—)150	200	300	600

註

如何ニシテ右ノ表ヲ作り出セシカト云フニ、例ヘバ三十人ノ労働者ニ對シ五〇畝ノ土地ヲ組合ハシテ其ノ結果二七〇石ノ收穫アルヲ知リタルハ、以前掲ケ置キシ表ニ依レバ、一町歩ノ土地ニ對シ六〇人ノ労働者ヲ組合ス時ハ、其ノ結果五四〇石ノ收穫アルコトニ爲リ居ルガ爲メデアル。又タ同ク三〇人ノ労働者ニ對シテ組合スベキ土地ノ面積ヲバ、五〇畝ヨリ増シテ五四 $\frac{2}{5}$ 畝ト爲ス時、其ノ結果トシテ三二六石強ノ收穫アルヲ知リタルハ、以前ノ表ニ依レバ、一町歩ノ土地ニ對シ五五人ノ労働者ヲ組合ス時ハ、其ノ結果六〇五石ノ收穫アルコトニ爲リ居ルガ爲メデアル。以下總テ之ニ準ス

右ノ表ニ依リテ見ルニ三〇人ノ労働者ニ對シ最初五〇畝ノ土地ヲ配スルナラ

バ、其ノ收穫ハ二七〇石デアル。然ルニ土地ノ面積ヲ増加シテ五四 $\frac{2}{5}$ 畝トセンカ、收

穫モ増シテ三二六石ト爲ル。即チ前ノ場合ニ比シ土地ノ面積ヲ増スコト四 $\frac{2}{5}$ 畝ナ

ルノ結果、收穫ヲ増スコト五六石デアル。然ルニ先キニ假定シ置キタル如ク、一町歩

ノ地代ヲ二〇〇石ナリトセンカ、新タニ四^六/_二畝ヲ増加シタル爲メニ支拂フベキ地代ノ額ヲ増加スルコト僅ニ九^一/_二石デアル。然ラバ此ノ場合ニハ、地代トシテノ出費九^一/_二石ヲ増加スル代リニ、收穫ハ五六石ヲ増加スルコト、爲ル次第ユヘ、利用スベキ土地ヲ増加スルガ利益ダト云フコトニ爲ル。此ノ如クニシテ以下順ヲ追フテ考ヘ行クナラバ、勞働者三十人ニ對シテ配スベキ土地ノ面積ハ、之ヲ一〇〇畝(一町步)マデ増加スルガ利益ナルコトガ分ル。蓋シ利用スベキ土地ノ面積ヲ八五^五/_七畝ヨリ増シテ一〇〇畝トセンカ、之ガ爲メニ増加スル地代ハ二八^四/_七石ナレドモ、増加スル收穫ハ三四石ト爲ル。(註)然ルニ更ニ其ノ土地ヲ増シテ一二〇畝トセンカ、地代ハ四〇石ヲ増セドモ、收穫ハ三〇石ヲ増スニ過ギザルガ故ニ、前ノ場合ニ比シ却テ收益ヲ減ズルコト、爲ルノデアル。今マ利用スベキ土地ノ面積ヲ増シテ一〇〇畝ニ至リタル場合、コレガ即チ土地ノ用^{トク}ノ、價格^{プライス}即チ地代^{地代}ガ土地ノ用ノ限界效用^{限界效用}(即チ限界生産物^{ジナルプロダクト}ト正ニ平衡^{イクワイリアム}ヲ保ツ點デアル、而シテ土地ノ用ニ對スル需要ガ斯カル點ニ決定セラル、モノナリト云フコトハ矢張り吾人ガ前ニ述べタル限界效用平均ノ法則ノ一適用ニ外ナラザルモノデアル。

註 此ノ場合ニ、増加スル地代ハ、二八^四/_七石ニテ、増加スル收穫ハ三四石ト云フヤウニ、出スモノト入ルモノトノ分量ガ正ニ一致スルコトニ爲ラヌノハ、利用スベキ土地チバ俄ニ八五^五/_七畝カラ一〇〇畝ニ増加シタル爲メ一度ニ増加シタ部分ノ土地ガ一三^七/_七畝ト云フヤウナ割合ニ大キナ面積ニ爲ツテ居ルガ爲メテアル。若シ此ノ増加分、incrementチバ小サクシテ例ヘバ一畝ヅ、殖ヤシテ行クト云フヤウニシテ計算チ出スナラバ、九九畝カラ一〇〇畝ニ殖ヤシタ時ニ、増加シタ地代ト増加シタ收穫トガ正ニ同額チ呈スルコトニナルヲ有ラウ。

扱テ以上述べタル所ハ、第一、第二ノ場合トモ、利用シ得ル勞働者ノ數ヲバー〇〇人ト云フコトニ限定シ置キタレドモ、若シ之ト異リ、企業者ハ如何程ニテモ勞働者ヲ使用シ得ルノ能力ヲ具ヘ居リ、且ツ一定ノ勞賃假ニ一人ニ付キ六石トスル)ヲ出セバ、勞働者ハ如何程ニテモ之ヲ雇ヒ入レ得ル場合ナリトセンカ事情ハ前述ベタル場合ト又タ大ニ異ルコト、爲ル。試ニ前ニ掲ゲシ第一表ニ本キテ、勞働者ノ増加ニ伴フ收穫ノ増加ヲ表示スレバ、次ノ如クデアル。

第四表

勞働者數	總收穫	最後ニ増加セシ五人ノ勞働者ニ因ル限界收穫	同上、勞働者一人當平均高者
5	50	50	10
10	150	100	20
15	270	120	24
20	380	110	22
25	450	70	14
30	510	60	12
35	560	50	10
40	600	40	8
45	630	30	6
50	650	20	5
55	605	(-)45	(-)9
60	540	(-)65	(-)13

此表ニ依リテ見ルニ、一町歩ノ土地ニ對シ最初五人ノ勞働者ヲ使用スル時ハ五
○石ノ收穫ナレドモ、更ニ勞働者五人ヲ増加スル時ハ、是ガ爲メ收穫ハ一〇〇石ヲ
増加シ、其ノ増加分一人ニ付キ二〇石ノ割合デアル。然ルニ先キノ假定ニ從ヘバ、勞
働者ニ向ツテ支拂フノ必要アル勞賃ハ一人六石ノ割合ユヘ、此ノ場合ハ使用スル
勞働者ヲ増加スルノガ無論利益デアル。此ノ如キ理由ニ依リテ、次第ニ勞働者ノ數
ヲ増加シ行キ、遂ニ四十五人ニ達スル時ハ、最後ニ増加セシ勞働者ノ爲メニ生ズル
増、收、額、ト、之、ニ、向、ツ、テ、支、拂、フ、勞、賃、額、ト、ガ、始、メ、テ、平、衡、ヲ、保、ツ、コ、ト、ハ、爲、リ、若、シ、其、レ、以、
上、ニ、勞、働、者、ヲ、増、加、ス、ル、ナ、ラ、バ、是、ガ、爲、メ、ニ、生、ズ、ル、増、收、ハ、之、ニ、向、ツ、テ、支、出、ス、ベ、キ、勞
賃、ヲ、償、フ、ニ、足、ラ、ザ、ル、コ、ト、ハ、爲、ル。故ニ此ノ場合ニハ、土地一町歩ニ付キ勞働者四十
五人宛ヲ利用スルガ最モ利益ダト云フコトニ爲ル。而シテ土地ヲバ此ノ如キ集約
度ニ利用スト云フコトハ、取りモ直サズ土地ノ一單位ヲ標準トシテ最大ノ收益ヲ
舉ゲ得ル所以ニテ、コレ亦タ吾人ノ先キニ述べタル最大差益ノ法則(第四節參照)ノ
一適用ニ外ナラヌノデアアル。

八、土地耕作ノ集約度ヲ決定スル事情（下）

今マ以上述べタル三種ノ場合ニ就キ其ノ結果ヲ約言シ、且ツ互ニ之ヲ比較シ見
シニ、

第一ノ場合ハ、例ヘバ新開地ノ如ク、土地ハ無限ニ存シテ之ニ向ツテ地代ヲ支拂
フノ必要ナキ場合デアル。此ノ場合ニ企業者ハ一〇〇人ダケノ労働者ヲ使用スル
ノ技能又ハ機會ヲ有スルニ止ルト假定スル。然ル時ハ、一町歩ニ付キ二〇人宛ノ勞
働者ヲ使用シ、全體ニ於イテ五町歩ノ土地ヲ利用スルガ、最モ得策ダト云フコトニ
爲ル。

第二ノ場合ハ、地代ヲ支拂フノ必要アルコトノミガ、第一ノ場合ト相違スル點デ
アル。而シテ其ノ地代ヲバ假ニ一町歩ニ付キ二〇〇石ト定ム。然ル時ハ、一町歩ニ付
キ三〇人宛ノ労働者ヲ使用シ、全體ニ於テ三^三/_一町歩ノ土地ヲ利用スルガ、最モ得策
ダト云フコトニ爲ル。而シテ之ハ労働者一人當ノ純益ヲ最大ナラシムル所以デア
ル。

第三ノ場合ハ、第一第二ノ場合ト異リ、一定ノ勞賃ヲ出セバ、欲スルダケノ労働者

ヲバ利用シ得ルモノ又ハ雇入レ得ルモノト假定シ、且ツ其ノ勞賃ヲ一人ニ付キ六石ト假定スル。然ル時ハ、一町歩ニ付キ四十五人宛ノ勞働者ヲ使用スルガ、最モ得策ダト云フコトニ爲ル。而シテ之ハ土地一單位當ノ純益ヲ最大ナラシムル所以デアル。

第一ノ場合ノ如ク土地ノ使用ニ向ツテ地代ヲ支拂フヲ要セザル場合ニハ、土地ハ節用スルノ必要ナク、唯ダ勞働者ヲバ最モ經濟的ニ利用スルノ必要アルノミナレバ、此ノ場合ニ考フベキコトハ唯ダ如何ニセバ勞働者一人當ノ收穫ヲ最大ナラシメ得ベキカト云フ點ニ在ルノデ、問題ハ甚ダ簡單デアアル。而シテ前ニモ云フ如ク普通ノ教科書ニハ、土地ノ利用ノ集約度ハ總テ此ノ如クニシテ決定セラル、モノノ如クニ説キアレドモ、實際ヨリ云ヘバ、土地ノ使用ニ向ツテ地代ヲ支拂フノ必要ナキ場合ハ、土地甚ダ廣大ニシテ人口甚ダ稀少ナル新開地ニ限ルコトニテ、決シテ今日ニ於ケル正常ノ場合デハ無イ。今日ニ於イテ正常ノ狀態ト目スベキハ、土地ノ使用モ勞働者ノ使用モ共ニ一定ノ費用ヲ要スル場合デアアル。然ラバ斯カル場合ニ土地ノ利用ノ集約度ハ如何ナル點ニ決定スルヲ最モ利益ナリトスルカト云フニ

其ニ就イテハ、第二ノ場合ト第三ノ場合トニ依ツテ答案ガ違フ。而シテ第二ノ場合ハ勞働者一人當ノ收益ヲ最大ナラシムル爲メノ計算デアリ。第三ノ場合ハ土地一單位當ノ收益ヲ最大ナラシムル爲メノ計算デアル。然ラバ吾人ハ如何ナル場合ニ第二ノ計算ニ依ルカト云フニ、其ハ土地ノ利用ヨリモ寧ロ勞働者ノ利用ヲバ出來得ル限り節約スルノ必要アル場合デアリ、第三ノ計算ニ依ルノハ、勞働者ノ利用ヨリモ寧ロ土地ノ利用ヲバ出來得ル限り節約スルノ必要アル場合デアル。故ニ勞働者ノ比較的ニ乏キ所ニテハ第一計算ニ依リ、之ニ反シ土地ノ比較的ニ乏キ所ニテハ第二ノ計算ニ依ルコトニ爲ル。

前ニ設ケタル假定ニ依レバ、第二ノ場合ハ、企業者ガ勞働者ヲ使用シ得ルノ機會又ハ技能ガ一〇〇人ニ限定サレ居リテ、而シテ土地ハ地代サヘ支拂ハ、如何程ニテモ思フダケノ面積ヲ利用シ得ルト云フ場合デアル。其故、コノ場合ハ明カニ土地ノ利用ヨリモ勞働者ノ利用ヲバ節約スルノ必要アル場合デアルガ、扱テ此ノ場合ニ、一〇〇人ノ勞働者ヲバ、 $\frac{3}{4}$ 町歩ノ土地ノ上ニ使用シテ如何程ノ純益ガ得ラルルカト云フニ、一町歩ニ付キ三〇人宛ノ勞働者ヲ使用シテ其ノ總收穫ガ五一〇石之ヨリ地代二〇〇石ヲ引ケバ殘高三一〇石、更ニ勞賃一人六石トシテ其ノ三〇人

分即チ一八〇石ヲ引ケバ殘ス所ノ純益一三〇石、而シテ利用セル土地ノ面積ハ三
丁^三町歩ナル故之ヲ乘ズレバ、ツマリ總體ノ純益ガ四三三石強ト爲ル。

然ラバ第三ノ場合ハ如何ニト云フニ、一町歩ニ付キ四十五人ノ勞働者ヲ使用ス
ルコト故、其ノ總收穫ハ一町歩ニ付キ六三〇石、之ヨリ地代二〇〇石ヲ引ケバ殘額
四三〇石デアル(イ)此時モシ前ノ場合ト同ク、勞働者ノ數ガ一〇〇人ニ限定セラレ
居ルトセンカ、利用スル土地ノ面積ハ二丁^九町歩ト爲ル。故ニ此ノ數字ヲ先キノ四三
〇石ニ掛クレバ九五五石ト爲ルガ、之ハ即チ地代ヲ差引キタル後ノ總體ノ收穫高
デアル。依ツテ之ヨリ使用勞働者一〇〇人分ノ勞賃六〇〇石ヲ引クナラバ、殘高ノ
三五五石ト云フモノガ此ノ場合ノ純益デアルガ、之ヲ前ニ計算シタル第二ノ場合
ノ純益四三三石ニ比スレバ、七八石ダケ少イコトニ爲ル。之ニ依リテ見レバ、土地ヨ
リモ勞働者ノ使用ヲ節約スルノ必要アル場合ハ、第三ノ方法ヲ採ルヨリモ第二ノ
方法ヲ採ル方ガ利益ダト云フコトガ能ク分ル。(ロ)然ルニ之ト異リ、勞働者ノ方ハ一
人六石ノ割合ニテ勞賃ヲ支拂ハバ、欲シシト思フダケノ人數ヲバ如何程ニテモ使
用シ得ルニ拘ラズ、土地ノ利用面積ハ最初ヨリ、第二ノ場合ノ利用面積ト同ジダケ
ノ面積即チ三丁^三町歩ニ限定セラレ居ルトセンカ、其ノ全體ノ面積ヨリ得ラルル所

ノ收穫ハ地代ヲ差引キテ一四三三¹/₁₀斗ト爲ル。而シテ一町步ニ付キ四十五人宛ノ割合ニテ勞働者ヲ使用スルコト故、總體ノ使用勞働者數ハ一五〇人ト爲ル筈デア
ルカラ、其ノ勞賃一人六石ノ割合トシテ總額九〇〇石ヲ差引クナラバ、殘リノ純益
ハ五三三石トナリ、即チ前ニ計算シタル第二ノ場合ノ純益四三三石ニ比スレバ、一
〇〇石ダケ多イコトニ爲ル。之ニ依リテ見レバ、勞働者ヨリモ土地ノ使用ヲ節約ス
ルノ必要アル場合ハ、第二ノ方法ヨリモ第三ノ方法ヲ採ル方が利益ダト云フコト
ガ能ク分ル。之ヲ要スルニ、使用スベキ勞働者數ニ一定ノ制限アリテ到底其レヨリ
以上ハ使用スルコト能ハザレドモ、土地ハ地代サヘ支拂ハ、如何程ニテモ思フダ
ケノ面積ヲ使用シ得ルト云フ場合ニハ、勞働者一人當ノ收穫ヲ最大ナラシムルヤ
ウ即チ勞働者ヲ基本トシテ最大差益ノ法則ヲ應用スルヤウニスルノガ、最モ得策
デアリ、之ニ反シ、使用スベキ土地ニハ一定ノ制限アリテ到底其レヨリ以上ハ使用
スルコト能ハザレドモ、勞働者ハ之ニ向ツテ勞賃サヘ支拂ハ、何人ニテモ思フダ
ケノ人數ヲ使用シ得ルト云フ場合ニハ、土地一單位ノ收穫ヲ最大ナラシムルヤウ、
即チ土地ヲ基本トシテ最大差益ノ法則ヲ應用スルヤウニスルノガ、最モ得策ニ爲
ルノデアル。之ニ依ツテ見レバ、土地ハ如何ナル程度ノ集約度マデ之ヲ利用スルヲ

最モ得策トスルカト云フコト、言ヒ換フレバ土地ノ用ニ對スル需要ハ如何ニシテ定マルカト云フコトハ、其レノ場合ニ就イテ論定シナケレバ爲ラヌノデ、決シテ簡單ニ斷定ノ出來ルモノデハ無イ。

土地ノ用ニ對スル需要乃至地代ノコトニ關シテハ、猶ホ論ゼザルコト多ケレドモ、本篇ハ元ト限界効用平均ノ法則ニ就イテ論述スルヲ主眼トシ、地代ノコトノ如キハ單ニ其ノ餘論トシテ偶々之ニ言及セシニ過ギザルコト故、論甚ダ調ハザレトモ、姑ク之ヲ以テ本論ヲ終結スルコト、スル。本論上篇之ヲ四月號ノ本誌ニ掲載シテヨリ月ヲ經ルコト四箇月、其間引キ續キ種々ノ出來事ニ妨ゲラレテ續稿ノ執筆ヲ延引シ居ル中、余ガ研究ハ既ニ他ノ問題ニ移リ行キ居リテ、今更舊篇ノ稿ヲ續クルニ頗ル苦ム所アリ、爲メニ論益々調ハズ、讀者請フ之ヲ宥恕サレンコトヲ、(完)

(附言) 既載上篇(第十四卷第四號)ノ中、八四頁十行目ニ

米一升ニ酒五合ニ貨幣貳拾錢

トアリシハ、

米一升ニ酒五合ニ貨幣貳拾錢

ノ誤植デアアル。

又タ「限界効用平均ノ法則」ト云フハ、慥ニ用語ガ不完全デアルト信ズル。福田博士ハ豫チテヨリ「限界効用平均ノ法則」ト云ツテ居ラル、ト云フコトヲ後カラ知ツタガ、無論平均ト云フヨリモ此ノ均等ノ方ガ適當デアアル。唯ダ此文字ハ標題ニマデ出シテ置イタモノデアルカラ、前後ノ連絡上、本篇ニモ其ノマ、之ヲ襲用スルコトニシテ置イタ。